

幼 児 教 育 斷 想

東京女高師教授 井 本 農 一

高等學校の時に三枝博音先生からドイツ語を教はつたことがあつたが、その時のテキストはフリードリッヒ・ヘッペルの自敘傳であつた。私には大變面白かつたが、中でも彼が幼児の時の思ひ出を非常に鮮明に書いてゐるのには驚かされた記憶がある。私にも幼児の思ひ出が全然ない譯ではないが、その印象は決して鮮明ではなく、一部は長じてから両親やその他の年長者から聞かされた自分の幼児の頃の話や自分の想像などによつて形成されたものを、恰も自己の記憶であるかのように錯覺してゐるのではないかと思ふのである。これはもとより私の不敏によるものではあるが、しかし一般にある程度はいひ得ることではあるまいか。幼児を取り扱ふ場合に、人は自己の幼児の頃の記憶をたよりにして取扱ふ場合が多いが、その記憶は可なりいゝ加減なもので、例へば自分が幼児の頃こんな風に物事を感じてゐたやうに思ふと考へて、それを自分の子供にその儘ではめてしまふことは、危険であるやうに私自身は思ふのである。だから、その誤差を修正するために、幼児に對する客觀的な、科學的な研究が進められ、それが幼児の取扱ひ方、幼児の教育に取入れられること

は當然であつて、近代の幼稚園教育は勿論その方向へ向つてゐることであらうと思ふ。私は幼稚園教育のことなどは全然無知なのであるが、一人の父親として漠然とさういふ風に考へ安心してゐるのである。

ところで、さういふ科學的な研究の成果として、理想的な子供部屋の設計が考案され、理想的な幼児の衣服が工夫され、理想的な食事、理想的な陶冶の方法の數々が、考へ出されることは、勿論望ましいことであり、その理想的なものに出来るだけ近づくと、世の父親、母親も力を盡くさなければならぬであらうが、時として科學的な研究を盲信することの餘り、餘りに非現實的な、非人間的な取り扱ひ方をすることとも起りさうに思はれる。といふのは、私の友人にも科學者を以て自任してゐる人々が可なりあるのであるが、その人たちと話をしてゐると、割り切れる筈のない人間のことを、あまりに簡単に割り切られてゐるのに、驚くことがあるからである。一見如何にも論理的なやうで實はおそろしく非人間的な、といふことは非論理的な判斷の下されることの多いのに驚くのである。勿論さういふ人達は實は本當の科學者ではな

いのであらうが、意外にさういふ場面に不出くはすことが多いのである。何だか、人間を離れて別に科學といふ巨大な怪物があつて、それが人間をふり廻してゐるのではないかといふやうな印象を受けることもある。わかり切つたことであるが、科學は人間の科學である。學問の尊嚴とか、科學の重要性とかの爲に、人間の尊嚴が押しつぶされてしまつては、本末顛倒である。

幼兒の教育に於て、科學的研究の成果が十分取入れられるべきであることはいふまでもないが、それは同時にどこまでも人間的なものでなければならぬ。即ち、一箇の人間としての博い教養と高い視野とが、科學的研究の成果を取入れる上での前提にならねばならぬであらう。幼兒の教育者が健全な常識の持主であつてこそ、科學といふ巨大な怪物にふり廻されないうで済むのである。だから豊かな教養を持ち平衡のとれた感情生活を營み得ることは、幼兒を取扱ふものの最初の條件といふべきではないであらうか。さういふ人間であつてこそ始めて、學問の奴隸とならずに、幼兒を人間的に扱ひ得るのだと思ふのである。尤も、これは「省みて他を云ふ」の類であつて、私自身がさういふ境地に至り得てゐる譯では決してないが――。

幼兒の言語について、特に兒童語といふやうなものはあるべきではないといつた人がある。多少發音のしにくい言葉で

x

x

x

あつても、幼兒が止むを得ず正確に發音出來ないのはしばらく黙過するとしても、大人はいつても正確に發音すべきで、幼兒に甘えてわざとその發音を崩すべきではないといふのである。例へば「いらつしやい」といふべきを子供の不十分な發音に真似て、「いらつチャイ」などと崩すべきではないといふのである。又「卵」といふべきを「タマタマ」といつたり、「髮」といふべきを「カンカン」といつたりするのは、無用のことで、最初から正しい言葉を覚えさせる方が、言語生活の發達が早く且つ順調だといふのである。しかし、これも、それこそ人間的な扱ひ方に従ふべきで極端な議論は避くべきであるが、しかし一面の眞理はあることを認めざるを得ない。幼兒の言語であるからといつて、何でも丁寧であればよいといふ譯のものではなく、やはり標準語に近い適當な丁寧さであるべきであらう。例へば「オ」の濫用などは兎角陥り勝なことで、名詞にはすべて「オ」をつけるものと思ひこませるやうな結果になることがある。幼兒の繪本をふと見てゐたらオスベリダイなどとあつたが、これなどはスベリダイで十分ではあるまいか。大體現在の日本語は女性化の傾向にあつて、軟弱に、冗長になり勝であるから、敬語、或ひは丁寧語の使用が過度にならぬやう留意すべきである。といつて亂暴でよいといふのでは決してないが、敬語といふものは頻繁に使用すると、その語の本來持つてゐる敬意がすり切れてなくなつてしまふのである。「お宅の大將にこれをあげてくれ」とか「そつちの先生に居眠りしちやいやいけな」といつてく

んな」などといふ時の、「大將」や「先生」は大分使ひふるされてゐるし、「貴様」とか「お前」などは敬意がすり切れ果ててゐる方であらう。そこで敬意を表す必要が切實であるとして、「先生様」などといふやうに本來の敬語の上に更に敬語を添へなければならなくなり、言語が冗長に軟弱になつて行くのである。それを防ぐには敬語を抑制して使ふことであつて、使ふべき時には必ず使ふと同時に、過度に使用しない用意が必要である。幼児の言語生活についてもこのことはいひ得るのではあるまいか。尤も小學生あたりの粗野な言語が幼児の言語を亂暴にしてゐる場合の方がむしろ多いのが現状であらうから、丁寧になり過ぎることより、やはり丁寧でないことを愛ふべきであるかとも思ふのではあるが――。

× × ×

私の父親は教育に關係してゐたので、子供の教育について父親に相談に来る人の話を、私は少年時から洩れ聞いてゐた。そこで長じてからも、人のところへ子供の教育のことで頼みに行くのは厭だ、子供だけは劣等兒でないのが欲しいなと思つてゐた。ところが人並に私も子供を持ち、だん／＼成長して行くのを見ると、私や私の妻や私の親戚たちの持つてゐる厭な點や困つた點をそのままそつくり持つてゐるのに且つは驚き且つは歎いたことなのである。考へてみればこれは當り前のことで、勿論子供自身には何の罪もないことで、さうであればこそ益々いじらしく感ずるのではあるが、この

間中村草田男さんに會つてその話をしたら、あなたなんかはそんなことはないだらうと思つてゐたのに實に意外な氣がした、私などは始終さういふことを感ずるといふやうなことを話され、自分ばかりではなかつたのかと思つたのである。親は誰でも自分の子供に夢を托するものであらうが、私も夢から醒めて見ると、健康な市民として「ホメラレモゼズ、クニモサレナイ」質實な人間に成長するやう子供を育てて行かなければならないとつく／＼思ふのである。こんなことは誰でも知つてゐる常識であらうが、やはりその場にならないと身に泌みてわからないのが人間といふものであらう。さうして、敢へていへば、世の父親、母親も、子供の教育についてはまづ健康な市民といふ最低の目標を立て、それ以上は子供の才能が自ら伸びて行くに従つて目標を變へるべきで、始めから親の夢を子供に強請することは、子供にとつても不幸であり周圍にとつても迷惑といふものではあるまいか。

× × ×

幼稚園の保母さんの仕事はいはゞ献身である。献身であるところにその仕事の尊さと純粹さがある。勿論どんな仕事だつてさうあるべきであり、別して教育についてはさういへよう。しかし高等學校や大學の教育の先生たちは必しも献身をしてゐない。献身をしてもその献身によつて直接酬はれるところがある。ところが、幼稚園の保母さん達は、その仕事に常に献身を要求しながら、何等直接の報酬がないのである。

例へば大學の先生たちには獻身の報酬として弟子が出来、立派な弟子に取り巻かれて自己の王國を建設することが出来る。だが幼稚園の子供達は十年も経つともう自分の汚れ物の世話をしてくれた保母先生の名前すら忘れてしまふのが大部分である。自分が一人で大人間になつたやうな顔をしてゐる。あんなに可愛がつてやつたのに——といふ歎きを保母さん達は持たないではゐられないであらう。それは人間として無理もない歎きである。いつも様の下の力持ちに終始してゐるもの押へ難い溜息であらう。だが、それだからこそ始めてその仕事に獻身だといひ得るであり、その仕事の美しさと尊さが出てくるわけなのであるまいか。私は自分の子供が世話になつてゐる幼稚園に行く度に感動を覚え、又心の和らぎを覚えるのであるが、それは次の世代の爲に獻身する保母さん達のこのいはゞ無償の行爲の美しさが私を打つのであらう。實際學者とか教育家といふ人達の中に勉強家や努力家は多い。だが大抵はみんな博士號が欲しかつたり、名聲を欲する人たちである。もう四十年近くも前に森鷗外が「當流比較言語學」といふ一文を著してゐる。少し長いが一部を引用しよう。

或る國民には或る詞が關つてゐる。

何故關つてゐるかと思つて、よく／＼考へて見ると、それは或る感情が關つてゐるからである。

手近い處で言つて見ると、獨逸語に *Seeber* といふ詞がある。動詞の *streben* は素と體で無理な運動をするやう

な心持の語であつたさうだ。それからがくやうな心持の語になつた。今では總て抵抗を排して前進する義になつてゐる。努力するのである。勉強するのである。隨つて *Streber* は努力家である。勉強家である。抵抗を排して前進する。努力する。勉強する。こんな結構な事は無い。努力せよといふ漢語も、勉強し給へといふ俗語も、學問や何か、總て善い事を人に勧めるときに用ゐられるのである。勉強家といふ詞は、學校では生徒を養めるとき、お役所では官吏を養めるときに用ゐられるのである。

然るに獨逸語の *Streber* には嘲る意を帯びてゐる。生徒は學科に骨を折つてゐれば、ひとりで一級の上位に居るやうになる。試験に高點を贏ち得る。早く卒業する。併し一級の上位にゐよう、試験に高點を貰はう、早く卒業しようといふ心掛ける、其心掛が主になることがある。さういふ生徒は教師の心を射るやうになる。教師に迎合するやうになる。陸進をしたがる官吏も同じ事である。其外學者としては頻りに論文を書く。藝術家としては頻りに製作を出す。えらゐるものもえらくないものもある。Talent の有るもの無しのものもある。學問界、藝術界に地位を得ようと思つて骨を折るのである。獨逸人はこんな人物を *Streber* といふのである。……學問藝術で言へば、こんな人物は學問藝術の爲めに學問藝術をするのではない。學問藝術を手段にしてゐる。……日本語に *Streber* に相當する詞が無い。それは日本

(十四頁へつづく)

たがるが、作らない子供
の事を考へると持たせら
れない

(ハ) 子供の遊びが一方的
になり一日何もせずに運
動場で遊ぶことが多い

しれないがまともりがつ
く

(ハ) 個性はのぼすがある
場合は社會生活をする人
の爲に我慢する。協力す
る気持ちを養ふ上に一齊
保育も必要である

(六) 附記(此の調査表に記入の際この項目以外にお気づき
になられた點が御座いましたらお教へ下さい。)

(イ) 小學校に併設されてゐる幼稚園は常に學校との折合
いを考へるので、幼稚園だけを切離して〇保育は考へら
れない。

(ロ) 自由に保育された子供は、學校へ行つて喜ばれない
點がある。

(ハ) 年長、年少兒、及び昨年度から引續き保育を受けて
ゐるものゝ混合組にした。その結果は割合に仲よく出來
る。

(ニ) 一日の中適當に一齊保育を入れて気持ちを整理し安
靜にさせることが必要と思ふ。

(ホ) 實際の統計には大分理想が入つて來るのではない
か。

(ヘ) 分團保育も一齊保育も兩方によい所があると思ふの
で、とりまぎせて正しい方向に持つて行き度い。

(ト) 現状のままでは小學校も幼稚園もお互に困難が多い

し、又此のままでは新保育を完全に行ふ事は出來ないか
ら、是非獨立園舎の増設をのぞむ。

(チ) 一齊保育と分團保育をくらべた時に理論ではいろい
ろと差が出て來ますが、實際にはあまりよくわかりませ
ん。

(六頁より)

人が Streber を卑むといふ思想を有してゐないからであ
る。

(當流比較言語學)

鵬外がこれを書いたのは明治四十二年である。それから
もう四十年にもならうといふのに、相變らず日本では學界に
も藝術界にも教育界にも、謂ふ所の Streber が充滿してゐ
る。だが、私の知る限りでは幼稚園にはこの Streber が少
いやうである。又萬一 Streber がゐては、取扱ふ對象が純
心な幼兒であるだけに弊害が深刻であるが、Streber の存在
をおのづから少くするやうなよい勢團氣がここにはあるので
はないかといふ氣がする。自分が獻身をしないのでゐて人に獻
身を要求することは出來ないが、幼稚園の仕事は Streber
の仕事でなく正に獻身であつて欲しいと思はずにはゐられな
い。それだからこそ私共はこの仕事を讚美し、この仕事を尊
敬するのである。技術や理論はそれからである。